

くしはら さむらい やしき いせき

櫛原侍屋敷遺跡

- 第 20 次発掘調査報告 -

平成 28（2016）年 9 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中央に位置し、水路と陸路の要所であることから、古くから筑後地域の政治・経済・文化・宗教の中心地として発展をとげてきました。

現在本市では、市民と行政がパートナーシップの理念のもとに協働し、本市が誇る地域資源である「水と緑」を活かし、歴史風土の継承に尽力しています。

今回の調査では、櫛原町の旧山脇邸・津田邸跡を調査し、江戸時代後期のゴミ捨て穴や溝などが見つかり、江戸時代を生きた久留米藩士の生活の様子の一部を考察する資料を得ることができました。

この成果を活かして、久留米市の市民文化や教育の発展に貢献できれば幸いです。また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました地権者ならびに周辺住民の皆様に心より御礼申し上げます。

平成 28 年 9 月 30 日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正則

例言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成27年度に ████████ 氏の委託を受けて実施した、櫛原侍屋敷遺跡第20次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。
本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と舟越朝菜が行い、浄書は「遺構くんcubic」で作成した。遺物の実測と浄書は江頭が行った。
3. 遺構写真は、マミヤRB67を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラD700を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系(世界測地系)を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、SDー溝、SEー井戸、SKー土坑、SPーピット、SXー埋甕を示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号はLKKー020、調査番号は201508である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	17

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成27年6月12日、[REDACTED]氏より、久留米市櫛原町58番2、3、5、6の一部、59番5における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である櫛原侍屋敷遺跡内にあたり、今回の調査地においても、江戸時代の遺構が残存している可能性があると考えられたため、6月30日、発掘調査が必要である旨を回答した。7月14日 [REDACTED]氏より、発掘調査の依頼が提出され、それを受けて久留米市長檜原利則と [REDACTED] は、9月17日埋蔵文化財発掘調査にかかる委託契約を締結した。久留米市教育委員会は10月20日より、発掘調査を開始した。12月2日に発掘調査を終了し、その後、平成28年9月30日まで整理作業と報告書の作成を行った。調査面積は200㎡である。

2. 調査の体制

調査委託者： [REDACTED]

調査主体：久留米市教育委員会 教育長 堤 正則

調査総括：市民文化部 部長：野田秀樹 文化芸術担当部長：甲斐田忠之(平成28年度)

次 長：竹村政高

文化財保護課 課 長：園井正隆(平成27年度) 馬場博文(平成28年度)

課長補佐：白木 守 山崎万里子

主 査：水原道範 事務主査：豊福早苗 塚本映子

調査担当：江頭俊介

整理担当：古賀和子 丸山裕見子(平成27年度)

発掘調査臨時職員

蒲池 稔、古賀香澄、合戸喬一、権藤 均、中村万喜男、野口忠勝、原口貞子、原 学、平田広之、舟越朝菜

発掘調査整理臨時職員

幸野美那

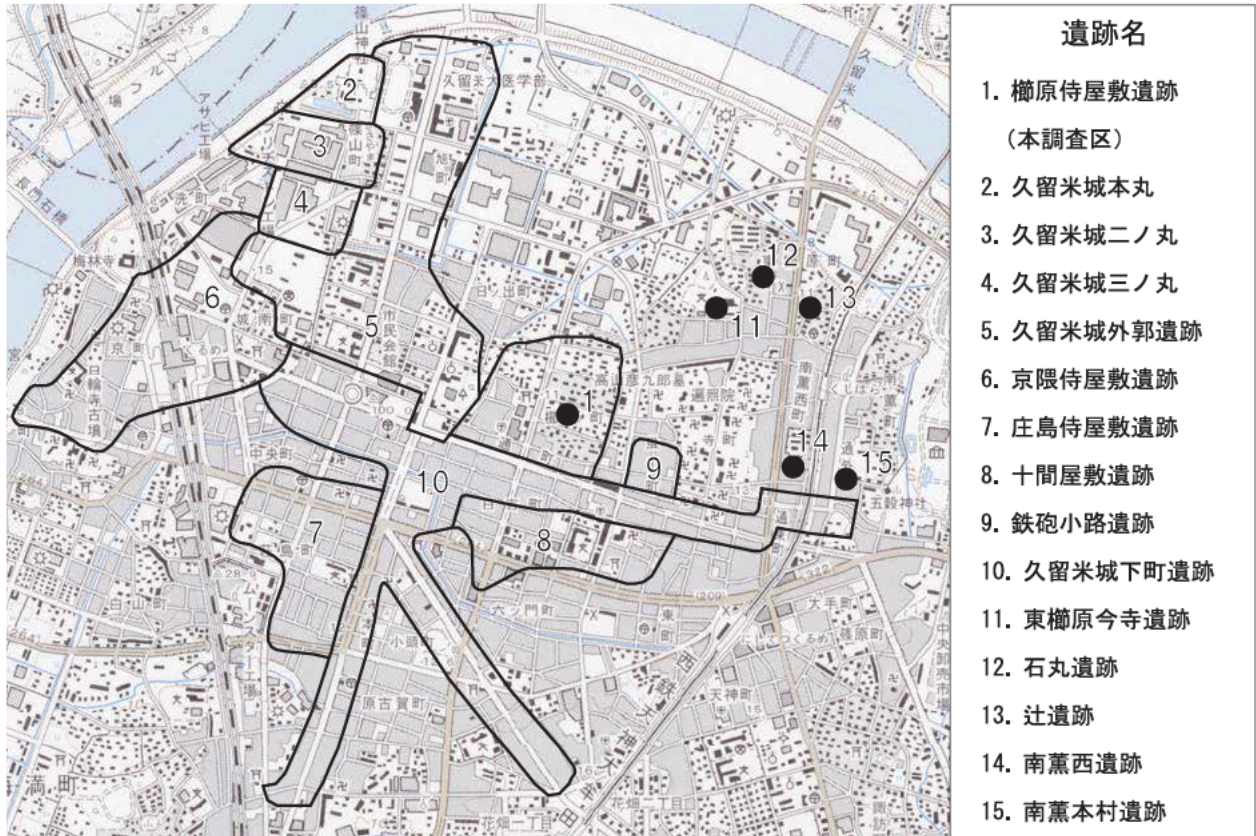
3. 調査の目的と経過

調査地は櫛原侍屋敷遺跡に含まれる。江戸時代の屋敷地の利用状況を確認することを目的として調査を行った。平成27年10月20日、調査区を設定し、翌21日より調査区南半分について、重機による表土剥ぎを行った。地表から70cmほど下で黄褐色の地山が検出された。11月16日より調査区を反転し、北半分の調査を開始した。12月2日までに各遺構の調査・記録を行い、発掘調査を完了した。その後、平成28年9月30日までは、遺物整理と報告書作成を行った。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くんcubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル、モノクロともに、6×7判で撮影した。

Ⅱ．位置と環境

福岡県久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中央に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後地区の政治・経済・文化・宗教の中心を占めた。近世には、小早川氏、田中氏を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は軍都として、また、繊維産業とゴム産業の街として栄え、現在まで県南の中核都市として発展している。

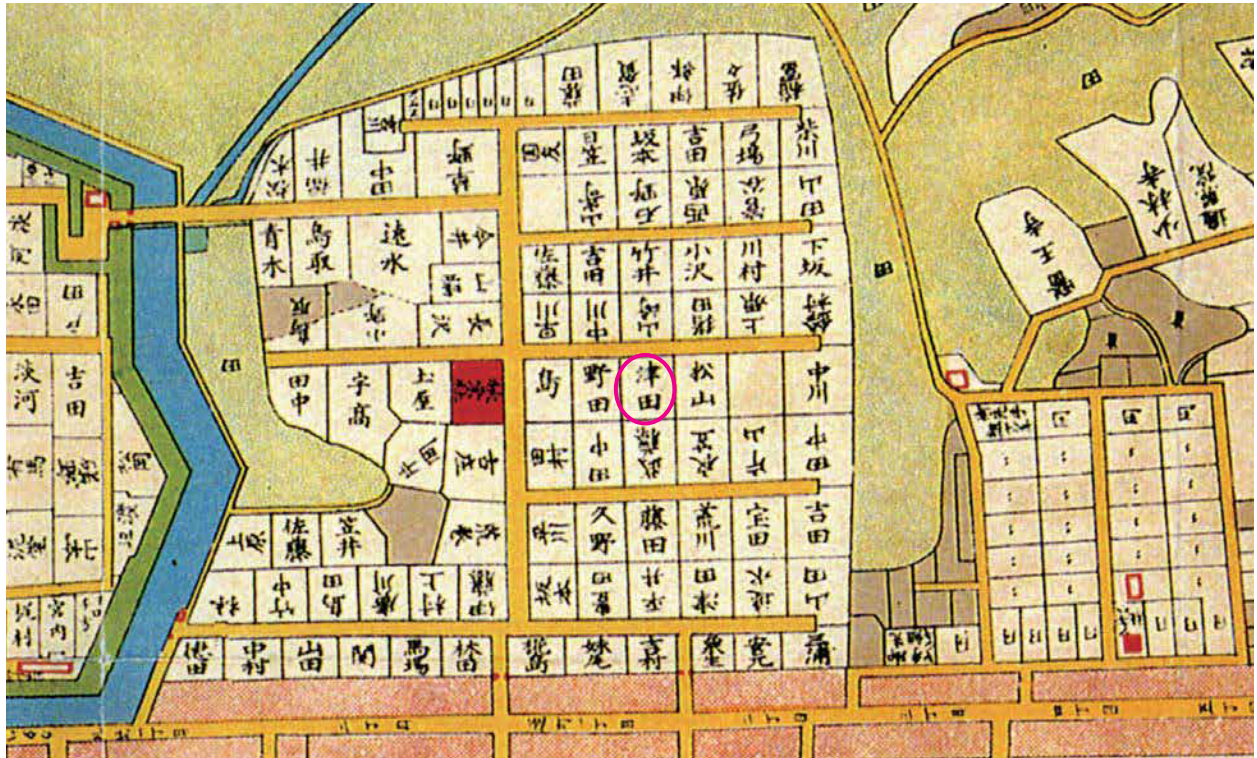
本遺跡は、筑後川によって形成された標高12mほどの低位段丘上に立地している。北側の氾濫原とは5mほどの比高差がある。周辺では旧石器がごくまれに出土するが、弥生時代になるまで明確な生活痕跡はない。弥生時代前期の松菊里型住居を伴う集落が東櫛原今寺遺跡で見つかっており、市指定史跡となっている。東櫛原今寺遺跡の北東に隣接する石丸遺跡では、支石墓や多数の甕棺墓・石棺墓が営まれている。奈良時代には御井郡節原郷となり、その中心的集落と考えられる遺跡が櫛原地区の東に隣接する南薫地区で見つかっている。南薫小学校改築に伴って実施された南薫西遺跡の調査では、「大神」「芋原」「大領」と書かれた墨書土器が出土しており、御井郡の郡司層に関連する集落と考えられている。平安時代には大宰府安楽寺領櫛原荘となった。現在の櫛原町周辺の50町(のち80町)の範囲であった。平成26年度の南薫西遺跡第8次調査では、9世紀の墨書土器「宅代」「馬」「寺」などとともに掘立柱建物や土坑が検出されている。戦国時代には、大友氏と龍造寺氏の争いがこの地で繰り広げられた。大友と龍造寺の両方に兄弟が分かれて味方した高良山座主勢力の内、龍造寺方についた座主弟麟圭は、秀吉の九州国割によって久留米に入城した小早川秀包によって誘殺された。その場所は、かつて本調査地の南に位置した東久留米村(現久留米市東町)であったと言われる。小早川秀包の治世の間、久留米城の周辺に城下町が形成された。久留米市役所建築に伴い平成3年に実施された久留米城下町遺跡第1次調査(両替町遺跡)の調査では、小早川時代のキリシタン教会の建物が検出されている。秀包が関ヶ原合戦に敗れ長門に退去したのち、筑後一国の主として田中吉政が柳川城に入城した。吉政は柳川城を主城、久留米城・福島城・城島城・赤司城を支城とし、それをむすぶ主要道の整備や、河川改修を行うなど、積極的な領国経営を行った。これにより、本調査地の西に位置する祇園原には町屋が建ち並び、祇園丁と呼ばれた。その後1621年の有馬氏入国により、久留米城下はさらなる整備が行われ、櫛原の段丘上には侍屋敷が建設された。現在でも敷地割の大部分が遺存している。櫛原侍屋敷は、南北400m、東西500mの方形を呈し、南辺を通町と接している。通町から北に走る主要道があり、侍屋敷の中心軸となっている。この軸と直交する東西道路が5本あり、南側から順に一番筋から五番筋と呼ばれる。これらの道路に沿って、一区画あたりおよそ400坪の屋敷地が94軒配置されている。侍屋敷の標高は南側が高く、北側へ向かって低くなる。一番筋付近の現在の標高は約12mを測る。侍屋敷建設時に段造成が行われていると考えられ、現に二～五番筋は道路の南側の屋敷地よりも0.5～1mほど道路のほうが低く、道路の北側の屋敷地は道路と同じ高さになっている。東西方向にも傾斜があり、段造成による高低差が隣地との境界に今でも見ることができる。今回の調査は、三番筋南側の旧津田邸について実施した。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 櫛原侍屋敷遺跡第20次調査区位置図 (1/2,500)



第3図 天保年間久留米城下図(部分) 久留米市史第2巻付図 ※赤丸は本調査区を示す。

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査では、溝5条、井戸1基、土坑11基、埋甕1基、ピット多数が検出された。主要な遺構について以下に記す。

溝

SD6 (第4・9図)

調査区南端で検出された長さ6.1m以上、幅0.9m、深さ1.1m以上の溝である、平面形状は連続土坑状を呈し、断面は逆台形を呈す。軸方向はN-73°-Wである、底面には0.5mほど高低差があり、調査区壁に近く、作業困難となったため、東端部分は深さ1.1mまでしか掘り下げていない、SD12より後出する。17世紀前半～18世紀前半の遺物を含む。

SD8 (第4図)

調査区南側で検出された長さ0.9m以上、幅0.5m、深さ0.2mの溝である、平面形状は直線を呈し、断面は丸みを帯びる。軸はN-80°-Wである。SK1より先行する。18世紀代の遺物を含む。

SD12 (第4・10・11図)

調査区東側で検出された長さ20m以上、幅0.7m、深さ0.3mの溝である。平面形状は直線的で、断面は丸みを帯びる。軸はN-14°-Eである。溝底面のレベルは、南側のほうが0.4mほど低い。SD6より先行する。17世紀代の遺物を含む。

SD43（第4・12図）

調査区北側で検出された長さ2.8m以上、幅0.4m以上、深さ0.6m以上の溝である。平面形状は直線的で、断面は未掘のため不明である。軸はN-73°-Eである。他遺構との切り合いはない。近世陶磁器と土師器の細片が数点出土している。

SD47（第4・13図）

調査区東側で検出された長さ3.4m以上、幅0.8m、深さ0.3mの溝である。平面形状は直線的で断面は丸みを帯びる。軸はN-72°-Eである。SD12、SK49より後出する。19世紀の遺物を含む。

井戸

SE17（第4・5・14図）

調査区中央で検出された直径1.0m、深さ1.0m以上の井戸である。平面形状は円形を呈し、断面は直線的に下方へ延びる。素掘りの井戸である。他遺構との切り合いはない。近世陶磁器等が出土している。

土坑

SK1（第4図）

調査区南側で検出された長軸3.7m以上、短軸3.4m以上、深さ0.25m以上の土坑である。平面形状は楕円形を呈す。断面は未掘のため不明である。SD8、SK11より先行する。18世紀後半から19世紀前半の遺物を含む。

SK11（第4・15図）

調査区南側で検出された長軸6.5m、短軸3.6m、深さ0.5m以上の土坑である。平面形状は楕円形を呈す。工期の都合上、深さ0.5mまでしか掘り下げていないため断面形状は不明である。平面形状がいびつであり、複数の土坑が切り合っている可能性がある。SK1より後出する。19世紀前半の遺物を含む

SK23（第4・5図）

調査区中央で検出された長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.5mの土坑である。平面形状は不定形である。断面は逆台形を呈す。複数のピットに後出する。18世紀の遺物を含む。

SK25（第4・16図）

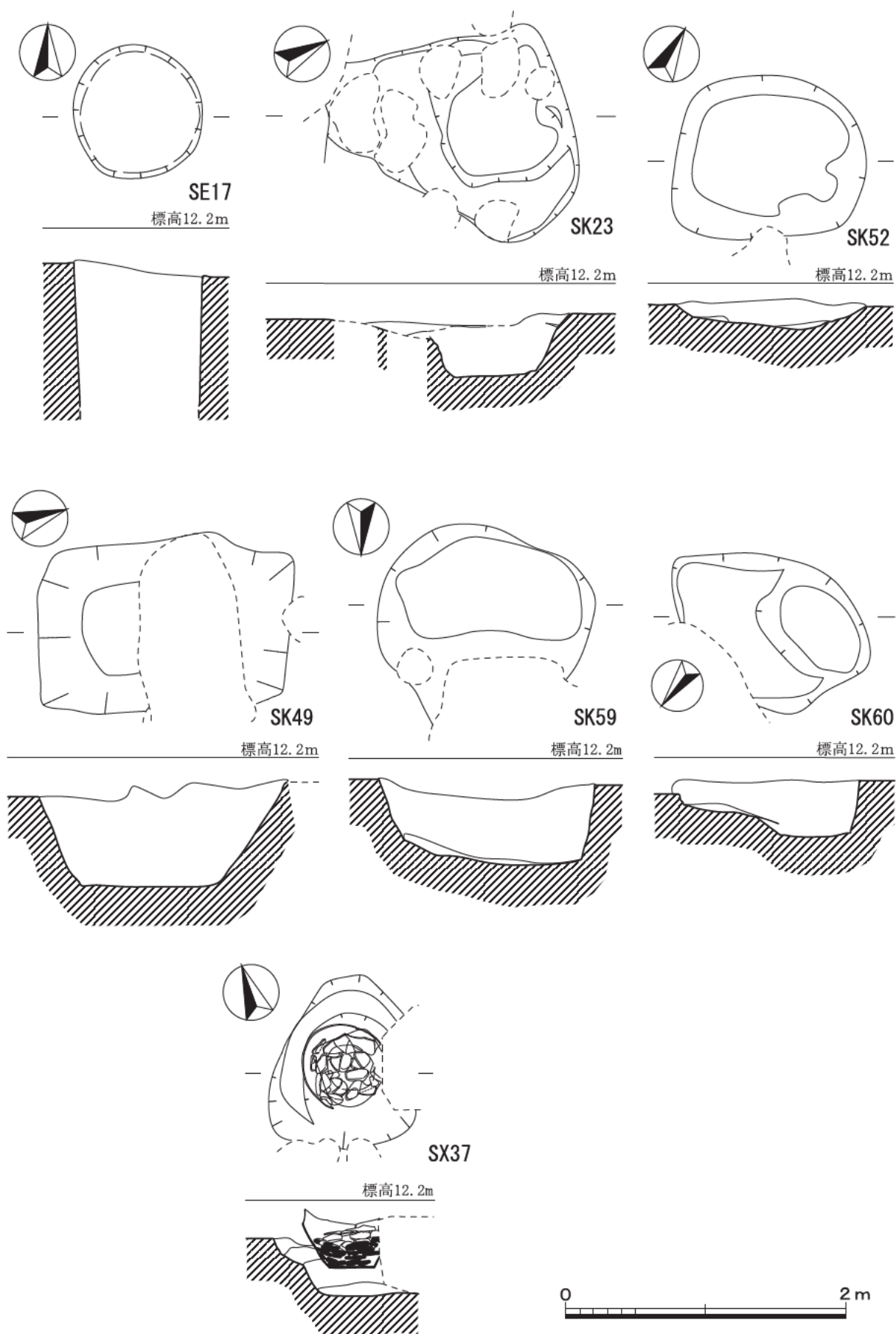
調査区西側で検出された長軸3.7m以上、短軸2.2m以上、深さ0.25m以上の土坑である。平面形状は楕円形を呈す。工期の都合上、深さ0.25mまでしか掘り下げていないため断面形状は不明である。複数のピットより後出する。19世紀の遺物を含む。

SK26（第4図）

調査区中央で検出された長軸1.6m以上、短軸1.1m、深さ0.25m以上の土坑である。平面形状は台形を呈す。未掘のため断面形状は不明である。SK25より後出する。18世紀後半～19世紀の遺物を含む。



第4図 遺構配置図 (1/150)



第5図 SE17・SK23・SK49・SK52・SK59・SK60・SX37遺構実測図 (1/40)

SK36 (第4図)

調査区中央で検出された長軸1.0m以上、短軸0.7m、深さ0.1m以上の土坑である。平面形状は隅丸方形を呈す。未掘のため断面形状は不明である。18世紀後半の遺物を含む。

SK49 (第4・5・17図)

調査区中央北寄りで検出された長軸1.8m、短軸1.2m以上、深さ0.8mの土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈す。断面は逆台形を呈す。SD47より先行する。18世紀後半から19世紀の遺物を含む。

SK52 (第4・5・18図)

調査区北側で検出された長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.2mの土坑である。平面形状は楕円形を呈す。断面は丸みを帯びる。弥生土器、須恵器甕の破片が出土している。

SK59 (第4・5・19図)

調査区北側で検出された長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.6mの土坑である。平面形状は楕円形を呈す。断面は丸みを帯びる。SK60より後出する。18世紀後半から19世紀の遺物を含む。

SK60 (第4・5図)

調査区北側で検出された長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.4mの土坑である。平面形状は楕円形を呈し、断面は丸みを帯びる。SK59より先行する。

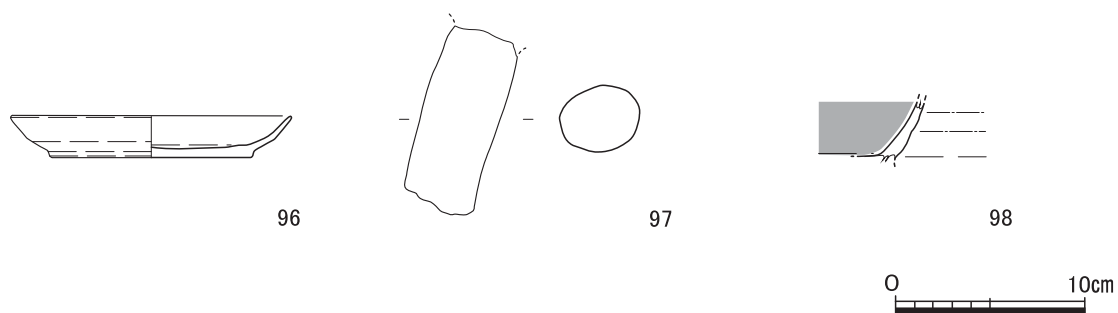
埋甕

SX37 (第4・5・20図)

調査区中央で検出された長軸1.2m、短軸1.0m以上、深さ0.5mの土坑に土師質の甕を据え付けた遺構である。土坑の平面形状は楕円形を呈す。断面は丸みを帯びる。甕の内部には10～20cm大の円礫が多数充填されている。甕の内面には黄灰色の付着物が喫水線を成していることから、便所甕と考えられる。複数のピットに後出する。18世紀後半から19世紀の遺物を含む。

2. 出土遺物 (第6・21～24図)

弥生土器細片、古代の土師器細片、須恵器片、近世の陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、鉄製品、銅製品、石製品などパンコンテナー2箱分の遺物が出土した。遺物の詳細については出土遺物観察表を参照願う。



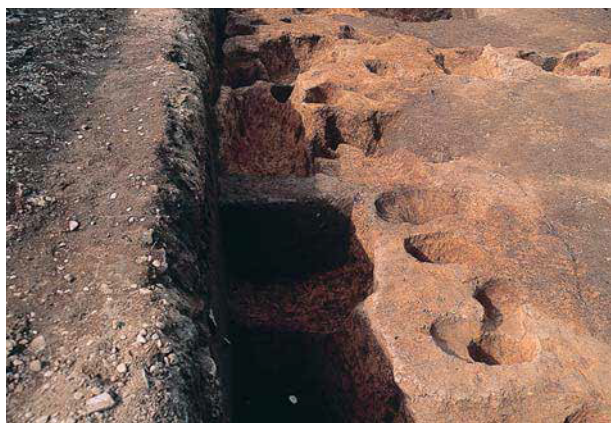
第6図 出土遺物実測図 (1/4)



第7図 南区近景（北西から）



第8図 北区近景（北西から）



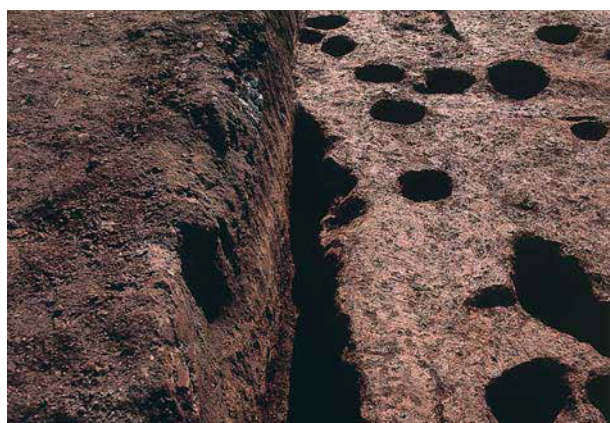
第9図 SD6土層断面（東から）



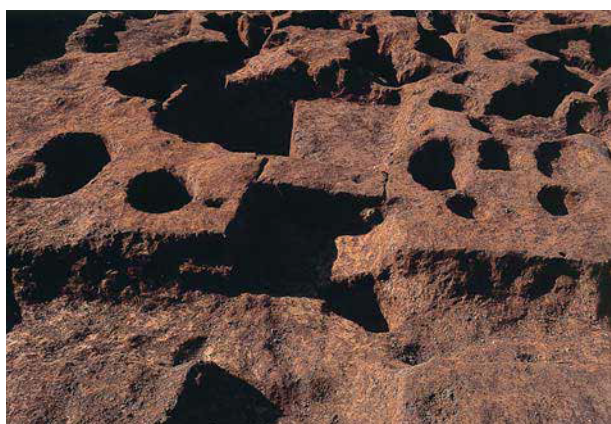
第10図 SD12完掘状況（南から）



第11図 SD12完掘状況（北から）



第12図 SD43掘削状況（北から）



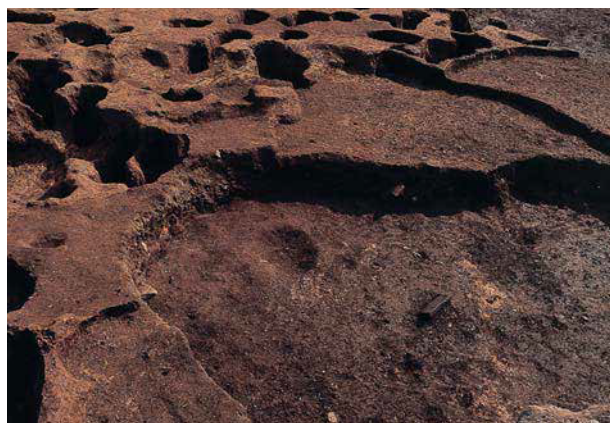
第13図 SD47完掘状況（東から）



第14図 SE17掘削状況（北から）



第15図 SK11検出状況（東から）



第16図 SK25検出状況（西から）



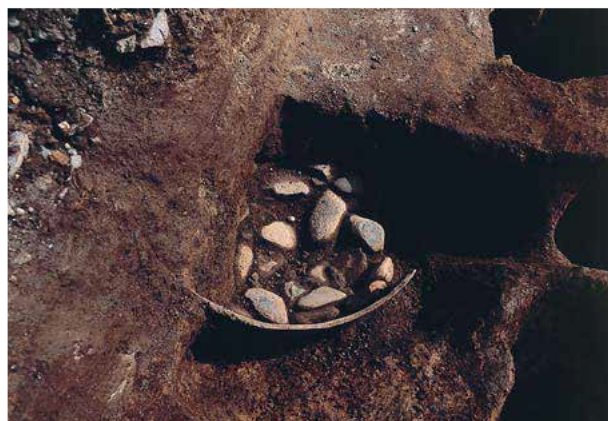
第17図 SK49土層断面（南から）



第18図 SK52掘削状況（南西から）



第19図 SK59完掘状況（西から）



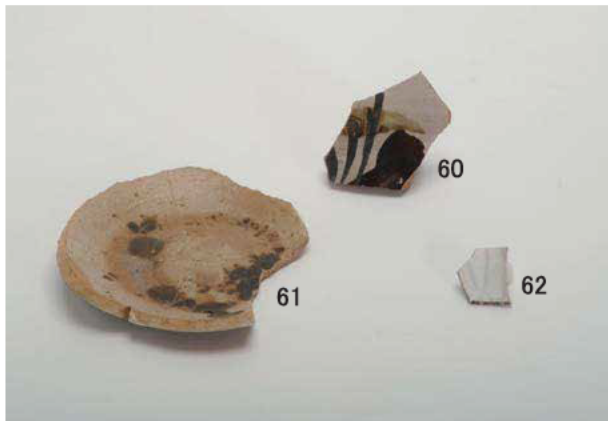
第20図 SX37検出状況（北東から）



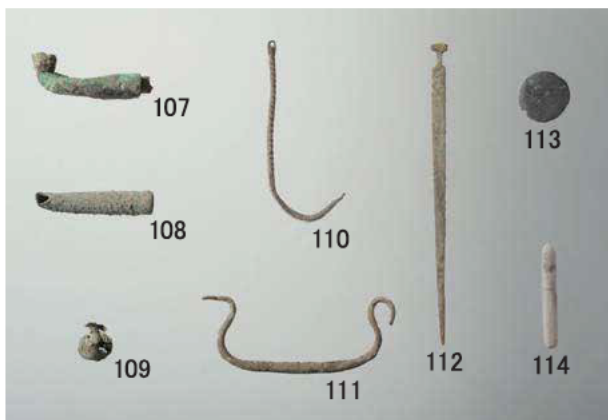
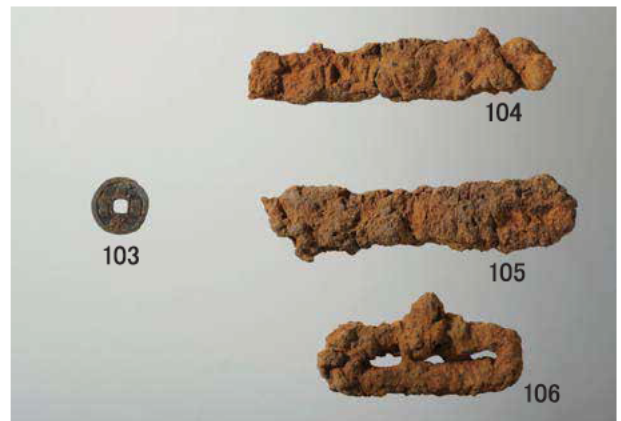
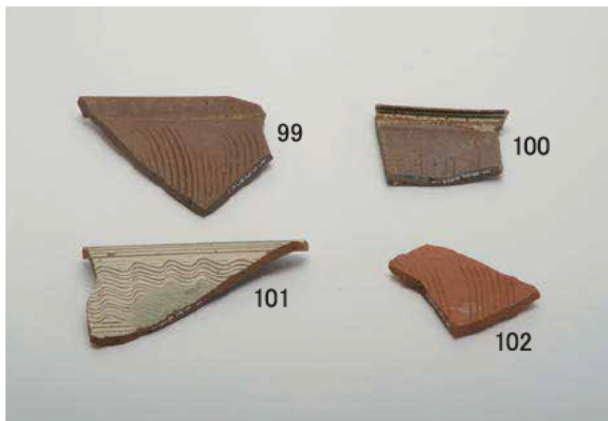
第21図 出土遺物写真1



第22図 出土遺物写真2



第 23 図 出土遺物写真3



第24図 出土遺物写真4

第1表 出土遺物観察表1 ()は残存値 []は復元値

遺物 番号	図番号	出土 遺構	材質	器種	法量			色調(染付・釉薬)		調整(文様)			胎土 (製作地)	備考・ 時代	登録 番号
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
					(長)	(幅)	(厚)								
1	第21図	SD 6	磁器	皿	[14.6]	5.2	3.3	染付	—	山水・舟	砂付着	白色精良・肥前	17C	201508 000016	
2	第21図	SD 6	磁器	碗	—	3.9	(1.9)	染付	—	圈線	—	灰白微砂粒・肥前	くらわんか	201508 000014	
3	第21図	SD 6	磁器	碗	—	—	(3.0)	染付	—	不明・圈線	不明	白色精良・肥前	貫入 18C	201508 000015	
4	第21図	SD 6	陶器	皿	[16.0]	—	(3.0)	灰釉	—	—	—	にぶい褐色・精良	溝線皿・17C 前半	201508 000017	
5	第21図	SD 6	陶器	皿	—	—	(2.2)	灰釉	—	—	—	灰白精良	溝線皿・17C 前半	201508 000018	
6	第21図	SD 6	陶器	皿	[12.8]	3.8	3.3~3.5	灰釉	—	—	砂目	砂付着	灰褐色・精良	17C前半	201508 000019
7	第21図	SD 6	陶器	鉢	—	—	(5.3)	褐釉	—	欄目文	—	赤褐色微砂粒・武雄?	17C?	201508 000022	
8	第21図	SD 6	陶器	鉢	—	—	(4.0)	緑釉	—	欄目文	—	灰黄褐色精良・武雄?	17C?	201508 000023	
9	第21図	SD 6	陶器	鉢	—	[14.8]	4.3	灰釉・褐釉	—	回転ヘラケズリ	砂目	高台部露胎	橙微砂粒・武雄?	201508 000021	
10	第21図	SD 6	陶器	甕	[33.0]	—	(5.1)	褐釉	—	—	—	0.5~4mm白粒	—	201508 000020	
11	第21図	SD 6	陶器	描鉢	—	—	(6.2)	明赤褐	明赤褐	回転ナデ	欄目10本	—	0.5mm白粒	17C	201508 000024
12	第21図	SD 6	瓦質土器	火入	—	—	(2.3)	灰黄褐	黄灰	—	—	—	0.5mm白粒・雲母(多)	白色付着物(内面)	201508 000026
13	第21図	SD 6	土師器	小皿	[8.8]	4.6	2.2~2.4	黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	0.5mm赤・白・黒粒	油煙付着	201508 000025
14	第21図	SD 8	磁器	小碗	[6.8]	—	(4.5)	染付	—	露草	—	—	白色微砂粒	—	201508 000027
15	第21図	SD 8	瓦	丸瓦	(6.2)	(7.0)	2.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	縄目	—	0.5mm白粒・雲母	素焼	201508 000029
16	第21図	SD 8	土製品	さな	[20.0]	—	1.5	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	—	1mm白色粒	鉄分付着	201508 000028
17	第22図	SD12	磁器	碗	—	[5.8]	(1.8)	青磁	—	—	蛇目稚刺ぎ	砂目	灰白精良	—	201508 000030
18	第22図	SD12	磁器	瓶	—	—	(12.7)	白磁	—	ナデ・押え・シボリ	—	—	灰白微砂粒	—	201508 000032
19	第22図	SD12	陶器	描鉢	[23.0]	—	(8.7)	褐釉(口縁のみ施釉)	—	ナデ	欄目13本	—	0.5mm白粒	17C	201508 000034
20	第22図	SD12	陶器	鉢	—	[9.4]	(4.5)	灰釉・緑釉	—	ケズリ	回転ナデ	砂目	武雄?・2mm白粒	—	201508 000033
21	第22図	SD12	陶器	壺	—	—	(4.5)	自然釉	—	ナデ	タタキ	—	3mm白粒	—	201508 000031
22	第22図	SD12	土師器	土鍋	—	—	(3.2)	浅黄橙	橙	ナデ	ナデ	—	0.5~1mm白粒・雲母	外面煤付着	201508 000035
23	第22図	SD47	磁器	小碗	6.5	2.7	3.0	染付	—	篋	—	—	灰白精良	—	201508 000066
24	第22図	SK 1	陶器	瓶	—	6.8	(4.2)	透明釉	露胎	ケズリ	回転ナデ	墨書あり	灰白精良	—	201508 000006
25	第22図	SK 1	磁器	仏飯器	5.9	3.8	5.1	色絵	—	蓮弁	—	—	白色精良	—	201508 000001
26	第22図	SK 1	磁器	皿	—	—	(1.5)	染付	—	線	松	高台部露胎	灰白精良	—	201508 000004
27	第22図	SK 1	磁器	皿	—	—	(1.1)	染付	—	線	竹	蛇目凹形高台	灰白精良	—	201508 000003
28	第22図	SK 1	磁器	碗蓋	[6.1]	3.9 (つまみ)	2.6	染付	—	鶴・楓引き松	線・×	寿	白色微砂粒	—	201508 000002
29	第22図	SK 1	土製品	鈴	5.6	4.3	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ・押え	ナデ・押え	—	0.5mm白粒・雲母	—	201508 000008
30	第22図	SK 1	陶器	瓶	—	—	(8.0)	褐釉	—	回転ナデ	回転ナデ	—	にぶい黄橙・精良	—	201508 000005
31	第22図	SK 1	土師器	皿	[16.6]	[13.0]	3.1~3.4	にぶい橙	にぶい橙	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	—	0.5mm白粒	内面に白い付着物	201508 000007
32	第22図	SK11	磁器	碗	[11.4]	4.4	5.9	染付	—	草花・連弁	四方棒・環状松竹梅	満福	白色精良	—	201508 000083
33	第22図	SK11	磁器	碗	—	4.1	(2.1)	染付	—	二重桐	菊花・二重桐	満福	白色精良	—	201508 000085
34	第22図	SK11	磁器	碗	[10.0]	4.3	4.9~5.0	染付	—	波	—	—	白色精良	—	201508 000084
35	第22図	SK11	磁器	碗蓋	[10.2]	4.0 (つまみ)	2.8~2.9	染付	—	棒	四方棒・五弁花	満福	白色精良	—	201508 000082
36	第22図	SK11	磁器	碗蓋	[9.6]	5.2 (つまみ)	2.7	染付	—	草花・兎	線・不明	—	白色精良	二次焼成	201508 000091
37	第22図	SK11	磁器	碗蓋	[10.2]	—	(2.5)	染付	—	竹・雪持笹	—	—	白色精良	—	201508 000090
38	第22図	SK11	磁器	皿	—	[10.0]	(1.1)	染付	—	—	花・不明	曇付露胎	灰白精良	—	201508 000086
39	第22図	SK11	磁器	小皿	10.2	5.8	2.5~2.6	染付	—	線・唐草	五弁花・撫子	大明年製・砂付着	灰白精良	コンニャク 印	201508 000088
40	第22図	SK11	磁器	段重蓋	8.2	—	3.4	染付	—	草花・蝶	—	—	白色微砂粒	最大径:9.3	201508 000092
41	第22図	SK11	磁器	水滴	(2.5)	(2.2)	2.9	染付	—	花卉	布目	—	白色微砂粒	型押し	201508 000095
42	第22図	SK11	磁器	小皿	(4.8)	(4.0)	1.8	染付	—	—	花唐草	露胎	白色精良	糸切細工・型紙摺	201508 000094
43	第22図	SK11	磁器	合子	4.9	—	1.3	染付	—	菖蒲・蝶	—	—	灰白微砂粒	—	201508 000093
44	第22図	SK11	磁器	小碗	7.2	2.9	3.7~3.8	染付	—	篋	—	—	白色精良	—	201508 000087
45	第22図	SK11	陶器	碗	10.1	3.6~3.7	5.3	透明釉	—	篋	—	高台部露胎	にぶい黄橙・精良	鉄絵	201508 000098
46	第22図	SK11	陶器	碗	—	3.6	(3.8)	透明釉	—	—	水	高台部露胎	にぶい黄橙・精良	鉄絵	201508 000097
47	第22図	SK11	陶器	皿	—	4.5	(2.4)	透明釉	—	ケズリ	回転ナデ	—	にぶい赤褐・微砂粒	—	201508 000104
48	第22図	SK11	陶器	皿	[7.4]	[3.6]	3.1	褐釉	—	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	—	橙・精良	二次焼成	201508 000103
49	第23図	SK11	陶器	瓶	—	6.4~6.6	(5.7)	褐釉	露胎	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	砂付着	赤褐色・微砂粒	—	201508 000099
50	第23図	SK11	磁器	瓶	—	6.0	(3.5)	青磁	—	施釉	回転ナデ・露胎	曇付露胎	白色精良	高台砂付着	201508 000096
51	第23図	SK11	土師器	小皿	[8.2]	[3.6]	1.8	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	0.5mm白粒・雲母	油煙付着	201508 000108
52	第23図	SK11	土師器	小皿	—	—	2.2	にぶい黄橙	灰白	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	0.5mm白粒・雲母	油煙付着	201508 000110
53	第23図	SK11	土師器	小皿	6.9	3.8	1.4~1.5	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	0.5mm白粒・雲母	油煙付着	201508 000109
54	第23図	SK11	土師器	小皿	—	4.9~5.0	(0.9)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	0.5mm白粒・雲母	—	201508 000105
55	第23図	SK11	土師器	小皿	[7.0]	[5.0]	0.8~1.0	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	雲母を多く含む	僅かに油煙付着	201508 000107
56	第23図	SK11	土師器	小皿	[7.0]	[5.0]	1.5	にぶい黄橙・灰黄褐	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	雲母を多く含む	—	201508 000106
57	第23図	SK11	陶器	甕	[24.2]	—	(13.5)	無釉	—	回転ナデ	タタキ後回転ナデ	—	0.5mm白粒	—	201508 000100
58	第23図	SK11	陶器	描鉢	[26.0]	—	(7.0)	褐釉(口縁のみ施釉)	—	回転ナデ	欄目11本	—	にぶい赤褐・微砂粒	—	201508 000102
59	第23図	SK11	陶器	甕	[28.0]	—	(3.4)	褐釉	—	回転ナデ	回転ナデ・露胎	—	にぶい赤褐・微砂粒	—	201508 000101

第2表 出土遺物観察表2 ()は残存値 []は復元値

遺物番号	図番号	出土遺構	材質	器種	法量			色調(染付・釉薬)		調整(文様)			胎土 (製作地)	備考・時代	登録番号
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
					(長)	(幅)	(厚)								
60	第23図	SK23	陶器	鉢	—	—	(5.1)	灰釉・緑釉・鉄釉		松?	回転ナデ	—	にぶい赤褐・微砂粒・武雄		201508 000040
61	第23図	SK23	陶器	土瓶	—	7.6	(1.5)	灰釉		回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・施釉	底部露胎・煤付着	にぶい黄橙・微砂粒		201508 000041
62	第23図	SK23	磁器	碗	—	—	(2.3)	染付		二重網	網	—	灰白微砂粒		201508 000039
63	第23図	SK25	磁器	小碗	[8.0]	[3.4]	4.2	染付		鶴	—	—	白色精良	貫入	201508 000052
64	第23図	SK25	磁器	小碗	[6.8]	3.2	3.3~3.4	染付		松	—	—	白色精良		201508 000051
65	第23図	SK25	磁器	小碗	—	[3.8]	(2.8)	染付		唐花	不明	—	白色精良		201508 000053
66	第23図	SK25	磁器	碗	—	4.6	(2.2)	染付		渦・連弁	十字花	乾	白色精良		201508 000054
67	第23図	SK25	陶器	土瓶	—	—	(5.0)	灰釉	にぶい黄橙	緑釉で文様	回転ナデ・露胎	—	精良		201508 000055
68	第23図	SK26	磁器	鉢	[17.6]	—	(5.8)	染付		龍・梅	山水	—	白色精良		201508 000047
69	第23図	SK26	磁器	碗	[8.0]	4.9	6.4	染付		宝・唐花	雷	乾	白色精良	素描き	201508 000044
70	第23図	SK26	磁器	碗	—	4.9	(2.7)	染付		不明	—	—	白色微砂粒	貫入	201508 000045
71	第23図	SK26	磁器	小碗	7.6	2.6	3.4	染付		草花	—	—	白色精良		201508 000043
72	第23図	SK26	磁器	小碗	7.8	3.3	4.7~4.8	白磁		—	—	—	白色精良		201508 000042
73	第23図	SK26	磁器	皿	—	[9.2]	(1.6)	染付		—	山水・目跡1ヶ所	蛇目凹形高台	白色微砂粒	貫入	201508 000046
74	第23図	SK26	陶器	碗	[10.0]	4.1	4.8~4.9	褐釉		—	目跡2ヶ所	—	灰褐・微砂粒		201508 000048
75	第23図	SK26	陶器	播鉢	—	—	(12.6)	褐釉		施釉	播目	—	細砂粒		201508 000049
76	第23図	SK36	磁器	小皿	—	3.8~5.6	1.9~2.0	染付		松葉	紅葉・折松葉	—	白色精良	糸切細工・コンニャク	201508 000058
77	第23図	SK36	陶器	播鉢	—	[13.0]	(6.7)	褐釉		施釉	播目・砂目	砂付着	橙・微砂粒		201508 000060
78	第23図	SK36	陶器	播鉢	[30.0]	[10.2]	11.1~11.4	褐釉		施釉	播目8本	砂付着	灰色精良		201508 000059
79	第23図	SK36	陶器	土瓶	—	[8.6]	(5.7)	灰釉	橙・露胎	回転ヘラケズリ	回転ナデ	脚付	精良		201508 000063
80	第23図	SK36	陶器	土瓶	—	[10.0]	(7.7)	褐釉	橙・露胎	体部施釉	回転ナデ	脚付	精良		201508 000062
81	第24図	SK36	土師器	焔炉	[19.2]	—	(7.1)	橙	橙	回転ナデ	刷毛目	—	0.5mm白粒・雲母	口縁煤付着	201508 000061
82	第24図	SK36	土師器	火鉢	—	—	(9.2)	橙	橙	刷毛目	刷毛目	—	0.5mm白粒・雲母	口縁部丹塗り	201508 000057
83	第24図	SK49	磁器	筒形碗	—	[6.8]	(5.0)	染付		線	—	髹付露胎	白色精良	貫入	201508 000070
84	第24図	SK49	磁器	鉢	[26.2]	—	(6.0)	染付		笹	—	—	白色精良	貫入	201508 000068
85	第24図	SK49	磁器	仏飯器	[7.4]	4.2~4.3	5.2	白磁		—	—	—	白色精良		201508 000069
86	第24図	SK59	磁器	碗	—	—	(5.0)	染付		草花	—	不明	灰白精良	くらわんか	201508 000075
87	第24図	SK59	磁器	小碗	[7.2]	[2.3]	3.4	染付		若松	—	—	白色精良	貫入	201508 000072
88	第24図	SK59	磁器	小碗	[7.2]	2.3	3.2	染付		若松	—	—	白色精良		201508 000073
89	第24図	SK59	磁器	小碗	[7.6]	2.5	3.3	染付		若松	—	—	白色精良	貫入	201508 000074
90	第24図	SP40	磁器	蓋	4.5	—	0.8	染付		寿	—	—	白色精良		201508 000064
91	第24図	SP40	磁器	壺	—	—	(6.5)	鉄釉・染付		貝	—	—	白色精良	型押し	201508 000065
92	第24図	SK59	磁器	碗蓋	[10.0]	4.2(つまみ)	2.8	染付		蔓草	四方襷・草花	—	白色精良		201508 000076
93	第24図	SK59	陶器	碗	[9.2]	3.4	5.3~5.4	透明釉		小杉	—	露胎	灰白精良	貫入・鉄絵	201508 000077
94	第24図	SK59	陶器	鉢	21.2	9.0	8.3~9.5	透明釉・灰釉・褐釉		ヘラ書き文様	目跡4ヶ所	露胎	にぶい褐色・精良		201508 000078
95	第24図	SK59	陶器	灯明皿	8.9	4.0	1.8~2.0	透明釉		口縁のみ施釉	施釉	糸切り	0.5mm白粒	口縁打欠・油塗付着	201508 000079
96	第24図	SK59	土師器	皿	[14.8]	[10.4]	2.2	明黄褐	橙	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	回転ヘラ切り	0.5~1mm白粒・雲母・角閃石	板状圧痕	201508 000081
97	第24図	SK52	土師器	脚	—	—	(10.0)	橙		ナデ・押え	—	—	0.5~1mm白粒・雲母・角閃石		201508 000071
98	第24図	SP62	黒色土器A	壺	—	—	(3.1)	明黄褐	黒	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	—	0.2mm白粒・雲母		201508 000082
99	第24図	SP 5	陶器	播鉢	—	—	(6.8)	褐釉(口縁のみ施釉)		回転ナデ	播目	—	精良		201508 000011
100	第24図	SP 5	陶器	播鉢	—	—	(4.4)	褐釉(口縁のみ施釉)		回転ナデ	播目	—	精良		201508 000010
101	第24図	SP 5	陶器	鉢	[37.0]	—	(4.4)	透明釉・灰釉		回転ナデ	刷毛目	—	精良		201508 000012
102	第24図	SP 5	陶器	播鉢	—	—	(5.3)	明赤褐	明赤褐	回転ナデ	播目8本	—	0.5mm白粒		201508 000009
103	第24図	SD 6	銅製品	銭貨	2.4	2.4	0.1	—	—	—	—	—	重: 2.35 g	寛永通宝(古寛永)	201508 000114
104	第24図	SD 6	鉄製品	鎌	(12.8)	2.4	1.0	—	—	—	—	—	重: 68 g		201508 000118
105	第24図	SD 6	鉄製品	茎?	(13.1)	2.8	2.0	—	—	—	—	—	重: 96 g		201508 000119
106	第24図	SD 6	鉄製品	銀	8.2	4.2	1.2	—	—	—	—	—	重: 60 g		201508 000120
107	第24図	SD47	銅製品	煙管雁首	4.7	1.2	1.7	—	—	—	—	—	重: 8.2 g		201508 000117
108	第24図	SP 7	銅製品	煙管雁首	(4.9)	1.0	1.0	—	—	—	—	—	重: 8.35 g		201508 000115
109	第24図	SK26	銅製品	鈴	(1.7)	(1.5)	(1.5)	—	—	—	—	—	重: 1.65 g		201508 000116
110	第24図	攪乱1	銅製品	釣針	7.8	0.3	0.2	—	—	—	—	—	重: 3.6 g		201508 000113
111	第24図	攪乱1	銅製品	把手	(8.2)	0.5	0.4	—	—	—	—	—	重: 9.8 g		201508 000112
112	第24図	攪乱1	銅製品	簪	12.8	0.2~0.6	0.1~0.2	—	—	—	—	—	重: 4.95 g		201508 000111
113	第24図	SP 5	石製品	基石	2.1	2.1	0.4	黒		—	—	—	重: 2.75 g		201508 000013
114	第24図	SK26	石製品	チョーク	(4.4)	0.6	0.6	灰白		—	—	—	重: 3.05 g		201508 000050
115	第24図	SE17	陶器	瓶	—	—	(5.1)	透明釉		—	—	—	灰白精良	貫入	201508 000037
116	第24図	SE17	瓦	平瓦	(6.6)	(6.8)	(1.0)	暗灰	灰白	ナデ・回線	—	—	0.5~1mm白粒・雲母		201508 000038
117	第24図	SE17	磁器	碗	—	—	(4.0)	色絵		不明	—	—	白色精良		201508 000036

IV. 総括

今回の調査では、溝5条、井戸1基、土坑11基、埋甕1基、ピット多数が検出された。以下、古い遺構から順に述べる。SK52と周辺の複数のピットは古代の遺物が出土しており、SK57出土土師器皿(96)やSP62出土黒色土器碗(98)などから、9世紀後半の年代が得られよう。古代のピットは櫛原侍屋敷遺跡の調査では頻繁にみられることから、当該期の集落が展開していたことが窺える。中世の遺構は検出されておらず、その間の土地利用の様子は不明である。近世の遺構SD6、SD12は軸方向を72～73° 東に傾けており、櫛原侍屋敷の都市軸と合致している。また、これらの溝は、現在の敷地境界とは2mほど離れているが、櫛原侍屋敷では、どの調査区でも共通して、屋敷境から数m引いた位置に溝を設置していることが看取できるため、本調査区においても同様にこれらの溝が屋敷境に伴うものであると考えられる。遺物はSD12が17世紀、SD6が18世紀前半までに収まるため、18世紀前半ごろに廃絶されたものとみられる。屋敷境の溝が廃絶される原因としては、居住者の変更や、防火帯の設置などが考えられるが、本調査区の場合はどうであろうか。当該屋敷地は、『延宝八年図』(1680)と、伝『元禄十四年図』(1701)では山脇家となっており、『天保年間図』(1830～1844)から『明治二年図』(1869)では津田家の屋敷地となっている。元禄9年(1696)の白石火事では、山脇家が被災しており、瓦礫の始末や、防火帯の設置、屋敷替えの三つの原因が考えられる。いずれにしても、この時期にSD12とSD6はその役割を終えたようである。次に18世紀の遺構としては、SD8、SK23、SK36が挙げられる。SK23とSK36は小型の廃棄土坑と考えられる。18世紀後半から19世紀前半の遺構は多く、SD47、SK1、SK11、SK25、SK26、SK49、SK59、SX37が挙げられる。SD47はSD12と直交し、屋敷地の軸に沿っているため、屋敷内のなんらかの区画を成すものと考えられるが、その用途は不明である。SK1、SK11は、大型の廃棄土坑である。屋敷地の最も奥にあたり、周辺には類似する廃棄土坑が集中している。SK59は小型の廃棄土坑である。屋敷地の遺構配置を見ると、調査区中央にSE17があり、その北側には小型の廃棄土坑やピットがあり、南側には大型の廃棄土坑がある。この井戸を境に北側が屋敷地の表側、南側が裏にあたると考えられる。次に、当屋敷地の住人であった山脇家と津田家について簡単に述べる。山脇家は、『延宝八年図』では山脇長兵衛が当屋敷地に居住している。伝『元禄十四年図』では山脇吉亟が居住している。『寛文分限帳』では、山脇吉之亟は馬廻り六番飯沼主米組140石とある。この時期、他に山脇喜兵衛(8石6斗、2人扶持)が御膳番配下帳附役として記載されているが、この二名の関係は、家系図が残っておらず、不明である。『天保年間図』からは津田家が居住している。津田家は関白豊臣秀次に仕え、秀次切腹の後、慶長13年、津田九郎次郎定勝の時に有馬氏に召し出され、200石で馬廻り衆として仕えた。天保から明治に当地に居住したことがわかっている津田廉平は、天保3年(1833)に300石で家督を継ぎ、元治元年(1864)に実施された久留米藩の兵制改革では、右備の御先手物頭に任じられている。歌人としても名を成し、明治6年8月27日に没した。

報告書抄録

ふりがな	くしはらさむらいやしきいせき だい20じはつくつちようさほうこく						
書 名	櫛原侍屋敷遺跡 第20次発掘調査報告						
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第370集						
編著者名	江頭 俊介						
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課						
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp						
発行年月日	平成28 (2016) 年9月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
くしはらさむらいやしきいせき 櫛原侍屋敷遺跡 だい じちようさ 第20次調査	くるめしきはらまち 久留米市櫛原町 ばん 58番2、3、5、 いちぶ ばん 6の一部、59番5	40203	33 ° 19 ' 7 "	130 ° 30 ' 56 "	20151020 ～ 20151202	200 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特 記 事 項	
櫛原侍屋敷遺跡 第20次調査	集落	古代 近世	ピット 溝 井戸 土坑 埋甕 ピット	多数 5条 1基 11基 1基 多数	弥生土器、土師器、須 恵器、近世陶磁器、土 師器、瓦質土器、瓦、 鉄製品、銅製品、石製 品	近世櫛原侍屋敷の旧山脇 邸、津田邸を調査	
要 約							
近世の武家屋敷である、櫛原小路(侍屋敷)三番筋の旧山脇邸・津田邸の南東隅を調査した。古代のピットや近世の廃棄土坑、井戸、屋敷境の溝などが検出された。							
土木工事の届出日		平成27年7月8日		遺物の発見通知日		平成27年12月7日 (27文財第1219号)	

櫛原侍屋敷遺跡
—第20次発掘調査報告—
久留米市文化財調査報告書 第370集
平成28年9月30日
発行 久留米市教育委員会
編集 久留米市市民文化部文化財保護課
印刷 香和印刷株式会社